News Release

令和７年３月６日

福岡市政記者各位

経済観光文化局文化振興課

令和６年度　福岡市文学賞　受賞者の決定 及び 贈呈式の開催について

令和６年度福岡市文学賞の受賞者が決定しました。下記のとおり贈呈式を行いますので、ぜひ取材いただきますよう、よろしくお願いいたします。

■　受賞者

部門	受賞者	作品名
小説	田中（たなか）　青（あお）	『ささら橋』
小説	野見山（のみやま）　悠紀彦（ゆきひこ）	「源重郎世事手控　袖の下」
詩	泉水（いずみ）　雄矢（ゆうや）	『unbox / 開けてはならない』

■　贈呈式

日時　：　令和６年３月 29 日（土）　13 時～14 時頃

場所　：　ソラリア西鉄ホテル福岡　彩雲「月」

（福岡市中央区天神２丁目２－４３　ソラリアプラザ８階）

○記念作品集の刊行

受賞者の作品を収録した「受賞記念作品集」を、４月上旬以降に福岡市総合図書館と各分館で貸し出します。（情報プラザ等でも閲覧可）

○福岡市文学賞について

【制度創設】　昭和 45 年度

【受賞基準】　本市または福岡都市圏に居住し、優れた著書の出版により顕著な文学創作活動を行ったと認められる個人

添付資料　別紙１　令和６年度（第 55 回）福岡市文学賞の受賞者について

別紙２　令和６年度（第 55 回）福岡市文学賞選考経過

【問い合わせ先】　経済観光文化局文化振興課　平井

電話：092-711-4664　内線 1801

別紙１

令和６年度（第55回）福岡市文学賞の受賞者について

○田中　青【 小説 】

昭和26年生まれ。福岡市東区在住。
平成18年から4年間大阪文学学校で学ぶ。
平成20年兵庫県明石市文芸祭小説部門受賞。
平成22年神戸エルマール文学賞佳作入賞。
『港の灯』同人。『飢餓祭』同人。『グループ〈道〉』在籍中。
『南風』同人在籍中。
【著書】『ささら橋』、『次郎337日』

○野見山　悠紀彦【 小説 】

昭和22年生まれ。
青山学院大学日本文学科卒　第一期生。
市内百貨店勤務後、執筆開始、主に時代小説を執筆。
同人誌『九州文学』同人　七期～八期。
現在『九州文学』編集委員。

○泉水　雄矢【 詩 】

昭和57年生まれ。福岡市城南区在住。
平成23年「さきがけ文学会」発会に携わる。
平成26年「さきがけ文学会代表」就任。
平成30年「ちょこっと文芸福岡実行委員会」発会に携わる。
平成30年「ちょこっと文芸福岡実行委員会代表」就任。
令和５年「第19回文芸思潮現代詩賞（奨励賞）」受賞。

（敬称略）

別紙２

令和６年度（第 55 回）福岡市文学賞選考経過

【小説部門】

福岡市文学賞は今年から公募制になり、小説部門には六名から作品が寄せられた。　まず各作品の検討を順次行った。

城戸祐介「精虫の旅」「ヒトの虚無」「反出生／出生」（キンドル）は、意欲とエネルギーに満ちた作品だが、作者の独白が大半で、小説としては大いに疑問が残った。

後藤克之「雨の休日」（文芸誌『絵合わせ』９号）は、小さな港町の佇まいが良く表現された作品。文章表現に粗削りな点が見られた。思い出話が大半を占め、それに少し頼りすぎている印象もあった。

木島丈雄「雨上がりの朝に」（九州文學５８４号）。妻が重病になり、子供がいず隙間風の吹いている夫婦に試練が訪れるが、それに何とか立ち向かおうとする夫の奮闘を描いた小編。まとまりが良く実力も感じさせる作品だが、話はここから始まるとも言える。

森美樹子「星月夜」（九州文學５８５号）はクリスマスの神戸を舞台にした三十代の男女の物語。きらびやかな街を背景にして二人だけの高校の同窓会という設定。作中の随所に作者の工夫が見られ、力のこもった作品だが、全体的に予定調和の印象がぬぐえなかった。

田中青「ささら橋」「次郎３３７日」。作品集である。家族を描く作品が多かったが、一人の女性の生きる葛藤とそれを表現しないではいられない熱量が読む者を圧倒する作品群である。すべてをさらけ出そうとする作者の思いが直截的な表現になることもあるが、筆力は確かで、小説としての完成度も高い。表題作の「ささら橋」は、行商に出た母をささら橋の袂で待つ少女のひたむきな姿が印象的。「だーだねか」は山陰地方の方言をうまく使ったユーモアと切なさが滲み出た好編である。

野見山悠紀彦「源重郎世事手控　袖の下」（九州文學５８３号）は時代小説である。江戸時代の隠居した同心が主人公。冒頭から小刀を携えて出かける主人公の姿が鮮やかに浮かび、一気に江戸の町へと誘われる、練達の筆運びである。江戸の下町の情緒、同心と岡っ引（親分）との有様、武士と商人、非人と呼ばれた立場の人々など、その時代の身分制度とその中での人々の生業がしっかりと描かれ、心に沁みる作品である。この作品は九州文學に掲載されているシリーズ物で、まとめて読むと一層作品世界が深く味わえるのではないか。

最終的には野見山、田中両氏の作品が残った。それぞれ全く個性が違う作品で甲乙つけがたく、二者同時受賞となった。ただし、田中作品の「次郎３３７日」はドキュメント性が強く小説としては疑問が残り、「ささら橋」のみを授賞対象作品とした。

【詩部門】

昨年まで選考委員が推薦したものが受賞候補となっていたが、本年度より自己エントリー制へと変更になった。また、対象に関しては、令和５年 11 月１日～令和６年 10 月 31 日までに公に出版された著書（詩集）となった。今回の選考対象になった詩集は刊行順に、緒加たよこ『彼女は待たずにそこに行く』（書肆侃侃房）、吉岡幸一『遮断開花』（私家版）、泉水雄矢『unbox/開けてはならない』（さきがけ文学会）、三重野睦美『たなごころ』（梓書院）、脇田正『老年の情景』（梓書院）の五冊である。

選考は、まず各委員が対象作品について一冊ずつ意見を述べた。その後、三名それぞれが推薦する詩集を二冊ずつ挙げて、その理由を述べた。最終候補として選ばれたのは、『unbox/開けてはならない』、『たなごころ』、『老年の情景』の三冊である。この三冊について、慎重に吟味しながら、討議を行った。

『老年の情景』は、「認知症」をテーマにした作品など、多くのひとが共有する現代の問題が描かれている。「あとがき」に「たとえ平凡であっても、何が書かれているかわかる詩。私はそんな詩作を心がけた」とあるように読みやすい詩集である。

『たなごころ』は、作者自身によるイラストが付されており、ひらがなも多く、一般のひとにも開かれた詩集である。空を漂うビニール袋に「いっしょに遊んでいこうじゃないか。」と呼びかける箇所など、ユーモアが効いたあかるい詩行が並んでいる。

『unbox/開けてはならない』は、表現力において、今回の選考対象の五冊の中では圧倒的に突出していた。例えば、「禍福」という作品の「禍福はその都度私たちを嘘つきにするから」などハッとするような一節に驚かされた。

議論の中で、『老年の情景』は、作者の視点が固定されているように見える点、言葉が文学よりも現実の側に寄っている点などの指摘があった。また、『たなごころ』は、直接的な表現で真正面から書いている点が評価を集めたが、「エッセイ」の印象が強く、「詩」としての物足りなさが残った。上記二冊と比較すると、『unbox/開けてはならない』は難解な詩集であるが、抽象的な観念に逃げずに具体的な描写にこだわることによって、私たちが生きる「現在」を捉えようとする姿勢が評価された。それぞれ個性的で魅力的な詩集であったが、現代の詩として優れていると評価した一冊に絞り、全員一致で泉水雄矢『unbox/開けてはならない』の受賞が決定した。

＊候補には挙がらなかったが、『彼女は待たずにそこに行く』は、「死」を背景に書かれた現代詩集である。書いている内容には概ね同意できるが、「詩」としての飛躍がないことに課題があるように思われる。『遮断開花』は、圧倒的な熱量で書かれており、ストーリーで読ませる作品も多い。だが、「教訓性」が強く働いている箇所が目立ち、読む者はそこに躓いてしまう。